

足立区基本計画審議会
答申及び意見交換会 議事録

令和6年9月4日

足立区基本計画審議会 会議概要

会 議 名	足立区基本計画審議会 答申及び意見交換会		
事 務 局	政策経営部 基本計画担当課		
開 催 年 月 日	令和6年9月4日（水）		
開 催 時 間	午後16時00分 ～ 午後17時15分		
開 催 場 所	足立区役所 中央館8階 特別会議室		
出 席 者	【委員】		
	宮本 みち子 会長	石阪 督規 副会長	秋山 知子 委員
	市村 智 委員	遠藤 章 委員	大竹 さよこ 委員
	笠井 健 委員	片野 和恵 委員	小柳 真太 委員
	中村 明慶 委員	野沢 てつや 委員	森元 隼人 委員
	山下 俊樹 委員	山下 友美 委員	渡部 郁子 委員
	渡辺 ひであき 委員		
	【事務局】		
	足立区区長 近藤 弥生	政策経営担当部長 勝田 実	基本計画担当課長 伊東 貴志
	基本計画担当係長 山崎 悠生	政策経営課長 鈴木 孝昌	政策経営担当係長 古田 信幸
	政策経営担当係長 鈴木 力	政策経営担当係長 高田 健一	政策経営担当係長 乾 洋平
	政策経営担当係長 芳賀 優美子	政策経営担当係長 菅原 慶知	
	株式会社 地域計画連合 相羽	株式会社 地域計画連合 柳坪	株式会社 地域計画連合 青野
	株式会社 地域計画連合 森田		
欠 席 者	國井 幹雄 委員	ぬかが 和子 委員	長谷川 勝美 委員
会 議 次 第	1 足立区基本計画審議会答申 2 区長挨拶 3 意見交換会 4 事務連絡		

資 料	・ 足立区基本計画審議会答申書
そ の 他	傍聴人：有・ <input checked="" type="radio"/> 無 人) その他参加者：有・ <input checked="" type="radio"/> 無 ()

様式第2号（第3条関係）

（審議経過）

（伊東基本計画担当課長）

大変長らくお待たせしました。定刻になりましたので、ただ今より足立区基本計画審議会答申及び意見交換会を開催します。本日はお忙しいところご出席をいただきまして、誠にありがとうございます。私は基本計画担当課長の伊東でございます。よろしくお願いいたします。まず会議に先立ちまして、謹んでご報告を申し上げます。本審議会の委員である加藤和明委員が、去る8月26日にご逝去されました。加藤和明委員は、足立区町会・自治会連合会会長代行として、本審議会にご参画いただき、新たな基本計画策定のために議論を重ねていただいたことは承知の通りですが、足立区議会議員としても平成11年の初当選から平成27年の途中まで区政の発展に尽くされ、区議会議長の重責も務められるなど、区に対して多大な貢献をいただいたところです。加藤和明委員は、これからも活躍いただくことを誰もが望んでいたところでございます。誠に残念ではございますが、本日いらっしゃる皆様と共に故人のご冥福をお祈りしたいと思います。

1. 足立区基本計画審議会答申

（伊東基本計画担当課長）

ここからは審議会の内容に入らせていただくにあたり、ご案内申し上げます。本審議会の答申及び意見交換会につきましても、会議記録を作成し、ホームページなどでも公開をさせていただきます。また、会議記録を正確に記録するため、録音をさせていただきます。広報紙やホームページ等に掲載するため、写真撮影をさせていただきますが、この点もご了承願います。なお、本日はぬかが委員、國井委員、長谷川委員がご欠席です。ぬかが委員から審議会に対するご意見を文書でいただいておりますので、席上に配付させていただきました。後ほどお目通しいただければと存じます。

それでは、本日の次第に沿って進めていきたいと思います。次第1、足立区基本計画審議会の答申になります。宮本会長から答申書の提出

をお願いいたします。

（宮本会長）

審議会では大変活発な意見がたくさん出ましてそれをまとめました。これからの基本計画にこれを反映していただければと思います。よろしくお願いいたします。

（伊東基本計画担当課長）

ありがとうございました。それでは宮本会長から、答申書の概要についてご説明をお願いします。

（宮本会長）

それでは、お時間の関係もあるものですから、答申書全部についての説明をすることはできませんが、これまでの足立区基本計画になかった新しい視点について、一部をご説明させていただきます。最も大きなポイントは、区民一人ひとりのやってみたい気持ちを後押しするもので、個人のウェルビーイングを向上させることはもちろん、まちの個性や魅力といった活力を生み出すだけでなく、目的や関心によりつながりを作り出し、安心な居場所を形成していくという点でございます。これは区の基本計画に掲げる、協創を生み出す源であることに加え、特別区に集積し、将来的な社会的孤立を抱える壮年期の単身者や、地域コミュニティの希薄化などの課題に対する解決の一助となると考えられます。区には性別や年齢、国籍、ルーツ、障害の有無、価値観、ひとり親世帯など家族のあり方、ライフスタイルなどの違いを認め、支え合う安心な地域づくりを進めていただき、そこから生まれる多様な人々のやってみたいが交差し、うねりとなっていく活力のあるまちをつくらせていただきたいと思います。このようなまちこそ、進化し続ける持続可能なまちを実現していくのだと思います。

（伊東基本計画担当課長）

宮本会長、ありがとうございました。それでは、次に近藤区長よりご挨拶申し上げます。

2. 区長挨拶

（近藤区長）

宮本会長、そして石阪副会長はじめ委員の皆様方には、長期間にわたりまして本当に熱心に

ご審議をいただきましたことを、まず感謝申し上げます。足立区の最上位の計画である基本計画。これによって様々な分野別計画が大きく影響を受けていくわけですが、今新しい考え方の一端を宮本会長から聞かせていただいて、何やら心がワクワクするようなそんな気持ちがいたしました。ただ、皆様方からの期待を今回の審議会に答申という形で私たちは引き継ぐわけですので、計画が作られて終わりではなく、まさにこれがスタートということで、両肩に大きな責任を感じております。ぜひ皆様方には、生みの親として、これから計画の進捗についても関心を寄せていただきまして、足立区のこれからのますますの発展にご尽力を賜いますように、よろしくお願いを申し上げます。

今日は皆様方のご意見を伺うことを中心に進めてまいりたいと思いますので、私からは個別の考え方や今後についての詳細については省かせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

3. 意見交換会

(伊東基本計画担当課長)

それでは続きまして、次第の3、意見交換会に移りたいと思います。先ほど宮本会長からご説明がございました、やってみたい気持ちの後押しでございますが、ここではそれをより具体的にどのように区民の方々一人ひとりのやりたいことを引き出して広げていくのが良いのか、ということをテーマに意見交換会を行いたいと考えております。意見交換会のコーディネーターは石阪副会長に、そしてアドバイザーは宮本会長にお願いしたいと思います。それでは石阪副会長、進行をお願いします。

(石阪副会長)

副会長の石阪です。今日は進行を務めさせていただきます。よろしくお願いいたします。先ほど事務局からテーマということで、やりたいことを引き出し、広げていくには何が必要かというお話をいただきました。皆さんとも共有したのですが、足立区にこの間の課題は、私は

基本構想の頃からずっと関わってきましたが、かなり区として様々な施策が充実してきました。ただ、人口の動態・動向を見てみると、若い方が入ってくるのですが、子育て・出産期になると区外に出ていってしまう。つまり、人口の係留地としての足立区があって、そこに定住をなかなかしてくれない。ですので、将来の人口構成や人口の動態を考えた時に、足立区は現在でも高齢化率は区内トップですよ。若い人がおそらくですが、足立区に1回住むのですが、埼玉などに出ていってしまう。これを防ぐためには、若い人たちが特に自己実現の場として足立区というフィールドを考えた時に、それがしやすい環境をいかにして作ってあげるのか。つまり、やりたいことを引き出して実現させるという、こういう視点が今まで少し計画に欠けていたのではないかとこの反省を元に、今回はこういった形で皆さんのご意見をいただいて、若い人たちを中心に。若い人だけではないですが、いろいろな方々がやりたいことができるような、そういう素地、環境を作っていく。これがまず大事なのではないかとこのことを共有させていただいたところです。

これはおそらく審議会の途中だったと思いますが、実際に若い方がメンバーにいないではないという話が出まして、実際に区の方で公募を掛けていただいて、本日いらしている森元委員に途中から入っていただいて、若い方の意見も聞こうじゃないかということで、今回メンバーができあがったわけです。今日はどちらかというと、区長に対する要望合戦みたいなものではなくて、やりたいことを引き出し広げていくには何が必要なのか。つまり、足立区の課題、これを克服していくための前向きな提案ですね。こういったところを皆様からお話をいただければと思います。先ほど会長からも答申の中でありましたが、例えばサードスペース。第3の場所ですね。家庭や学校以外の居場所。これが足立区には本当にあるのかとか

ですね。それから、例えば市民活動とか町会の活動をしていく上で、加入率がどんどん下がっている中で、そういった活動をしていくための様々な支援であるとか、あるいは協力関係があるのか。こういったところも一つ課題でした。

この間、協創という考え方も足立区ではありますが、その協創という考え方が本当に区民に浸透しているのか。こういったところも課題としてあると思います。ですので、今日は意見交換会ですから、本来であれば区長や事務局がお答えするやりとりになりますが、本日はそういうことではなくて、皆さんの思いとか考えをこの場でご発表をいただきたいと思っています。

まず、口火を切っていただきたいのは森元委員なのですが。途中から入られて、年配の方や比較的年を召した方が多い中で、若い人の思いを伝えていただきました。足立区はこの辺は課題として感じましたか。

(森元委員)

公募委員の森元です。尊敬する区長がいる前でかなり緊張しているのですが、何卒よろしく願いします。課題というか、僕は審議会の中でも申し上げたのですが、足立区のこういう場に出てくる人だったり、意見を言おうという人はやっぱり言おうという強い気持ちを持って出ている人が多いと感じているので、だからこそ日常生活の中で例えば教育かもしれませんし。先日各自配付したタブレット端末にアンケートを流して、意見の吸い上げをしたという話を伺いましたが、そういう形でもっと生活に密着しながら、そういう子どもたちであったり、なかなか意見を伝える術を持たない人たちが意見を上手く出していくようなシステムづくりが区政に必要なのではないかという課題感は感じています。

(石阪副会長)

足立区に住んでいたいという若者は、実際に周りにいますか。

(森元委員)

外からよりも、やはり足立区内に住んでいる

人は、今後も足立区に定住したい。もしくは、同級生でも既に足立区内で家庭を持っている人も多いですね。

(石阪副会長)

その先を聞きたいですね。例えば子育ての環境であったり、他の23区と比べてサービスとか。このあたりは、そこそこ私は良くなっていると思うのですが。ただ、一方で若い人たちが出ていくという背景もあるんですね。このあたりはどうでしょうか。他の区に住んでしまうことについて。

(森元委員)

僕は大学生ですが、同じ大学生の目線で考えると、あまりどこの区に住むとか、その行政システムがとても良いからここに住みたいかな選択肢ではなく、割と駅に近いからとか、大学に近いからとか、そういうような選択肢で選んでいるイメージがあります。

(近藤区長)

家賃がリーズナブルだとか、駅に近い割には家賃が安いといったことで最初入ってきた方を、どうやってつなぎ止めていくのかですね。それと意見というのは集約することは簡単ですが、結局言っても実現されないといううちに、どんどん集約できる意見の数が減っていくと思います。ですから、聞く耳をしっかりと持って、全部が全部100%実現できないまでも、部分的に実現ができるとか。やはり要望すればそれなりの形で返ってくる、そこにコミュニケーションが生まれると思うので。これからはただ単に意見を集約するだけではなく、どうやってそれを返していくのか。目に見える形で実現も含めた可視化、そういったプロセスが非常に重要になる気がします。今、国も集めろ、集めろ、聞け、聞けと言っていますが、聞く力だけでは国民が納得しないのは、どこかの偉い人と一緒なのでね。そこはすごく重要だと思います。

それと、やりたいことを引き出すと言うと、今、綾瀬の「あやセンターぐるぐる」が足立区でも最先端を行っていると思いますが、想像以上にやりたいことをやりたい人が多いのだなという、そういう感触です。ですから、逆に委託

業者が人を増やさないとならない。最初これぐらいやりたい人が出てくるだろうと思っていたら、その上に行く勢いでやりたいことが集まっているということですから、それもさっき言ったように、じゃああなたがやりたいことを実現するためには、こういうことが必要ですよという伴走支援をして、それを形にしてやりたいことにつなげているというのが今はありますから。これはなかなかこれだけ大きな足立区ですから、綾瀬1か所というわけにもいかないの、似たような取組みを複数の地域でやっている中で、その地域ごとで横につながっていったりして、さらにやりたいことが大きくなっていくみたいなプラスのスパイラルを作っていきたいと考えています。

(石阪副会長)

まず人の話を聞くということですが、今回、子どもたちの声を聞くということ、かなり足立区では注力してしたのですが。これは僕、一歩前進だと思っていて。今までは親の意見であったり、どちらかという組織のトップの意見などが中心だったのですが、今回は確かタブレットで広く子どもたちの意見を。つまり簡単に言えば、子どもたちの意見は親の意見ではないので、そういった方々の意見を反映させたというのは大きかったかなと思います。

(近藤区長)

読んでみて怖かったです。非常に厳しい目で大人を見ていますよね。ごみを捨てているとか、たばこを吸っているとか。ですから、それは見られているという意識を持って、大人の規範意識というか、それを少し高めていく必要があるなと思いますよね。結局、足立区の大人はという形で、子どもが決め付けてしまって、大人になったら違うところに行こうという気持ちにつながらないとも限らないので。

(石阪副会長)

固定観念のステレオタイプが子どもに継承されて、今の足立区ができあがっていると思いますが、それをどこかで断ち切らないと、大人を見ていますからね。大人が、足立区なんて、って言っている区では駄目ですね。子どもは見ていますから。他にいかがですか。

(秋山委員)

秋山と申します。千住に住んでいまして、結婚を機に引っ越してまいりました。小学3年生の子どもを育てていて、PTAの役員をした後、銭湯のお手伝いをちょっとしています。以前は杉並区の職員をしておりましたが、退職して12年経っているの、かなりブランクがあるのですが。そういった関係からも、今回この審議会に参加させていただけたことを、自分の人生にとっても大きなきっかけになりました。本当に感謝の思いでいっぱいです。

私から申し上げたいことは、さっき森元委員がおっしゃった若者の意見を聞く。それは素晴らしいことだと思います。私は足立区のサービスは全般的に見ていて非常にきめ細かいというのを感じています。ただ、その中に区民がサービスを受け手、そして行政がサービスの提供側というような構造が若干見えているというか、区民がそれに甘えると言ったら言葉があれですが、どんどん要求が大きくなっていったり。私は、それはちょっと違うと思っていて。今回この審議会に参加させていただいて、私が区民の1人として自分の力で考えて参加することによって、やっぱり自分ごととして区政を捉えられるようになりました。ですから、そのように自分ごととして区政を捉えられる区民を増やしていくことが私は大切だと思っています。

なので、このような規模の審議会ではなくても、例えばちょっとした、私は以前、障がい者の部署にいまして、おむつの配付などをやっていたのですが、それにしても利用者を集めて座談会をさせていただいて、意見を聞く。聞くことによって区民の方も自分ごととしてそれを捉えて、サービスの受け手ではなくて、行政の事情を考えたりできるようになって歩み寄れるとか。そんなふうに区政を実際に司る職員と区民が同じ立場で話し合う機会を、小さくてもいいのでたくさん設けていくことが、これからの時代の新しいあり方ではないかというのを私は思っております。

ですから、集める、意見を聞くというのはすごく大きな1歩なのですが、私たち区民もそこから1歩進んで、自分が動けるようになるよう

なその土台というのも、ステージを用意していただけるとうれしいです。

(近藤区長)

ありがとうございます。具体的にどんなステージをイメージされていますか。

(秋山委員)

今回この審議会では、公募をして意見を聞きましたよね。Webと対面で直接意見を聞いたり。そんな感じでどなたでも意見が言えるような場をたくさん作ればいいのではないかと思います。自由にやはり自分の意見が聞いてもらえる。そして相手の検討を聞けるというチャンスがある、多いというのは区民にとってすごく自分ごととして考えるきっかけになると思っています。

(石阪副会長)

まず一つは行政サイドの問題として見ると、サービスの単なる送り手ではなくて、むしろ対話をするような機会があって、自分自身も区民の立場になって考えるような場を増やしたり、他区で職員をされたが故の思いもあるかもしれませんが、そういうことを心掛けてやっていたということですね。もう一つは逆に区民側として見ると、もっと主体的にこういった、この審議会もそうですし、様々な場に入っていくって、自分たちの考えとか思いを伝える場。これを増やしていくこともありますし、両方の課題ですね、そうするとね。だから足立区というのは、そういう意味では行政サービスがしっかりしているぶん、区民はそれを受けるだけ、サービスを受ける側だけになってしまっている。このあたりの組織やシステムをちょっと変えてみてはどうかというご意見だと思います。他にいかがですか。山下友美委員、子育て世代だと思いますが。

(山下友美委員)

小学校のPTAをさせていただいてという保護者の目線と子育ての目線で、今の事業というか、子育て支援を提供している団体なので

が。やはりしてやっている感というのを出してしまうと、やはり悲壮感っていうか、されている感を引き出してしまうと、劣等感だったりそういうがあるので。インクルーシブにというのは、あとはボーダーレスで、同じ目線で同じ立場にならないと、どうせ言っても分かってもらえないだろうというのがすごくあるんですね。利用者の話を聞いていてもそうですし。

(石阪副会長)

行政に対してそう思っているのですか。

(山下委員)

そういった意見も来ているんです。お母さんが困っているから区の方をお願い、要望をしたところ、同じ目線に立ってくれていないと。そんなことはないのでしょうけど、行政の方もそんなつもりはなくやっているのですが、そういうので私もそうですが、ひとり親なので敏感なんですよ。あ、やっぱりそういうふうにされているんだなという、そういう扱いになってしまうことを敏感に感じてしまうということ。で、同じ目線、立場というのはすごく大事で。言っているだけではできないということもあるので、そこがすごく大事なのではないかなというのはひしひしと思います。

(石阪副会長)

同じく笠井委員、PTAの立場からいかがですか。

(笠井委員)

今までの皆さんの話を聞いていて、なるほどということばかりなのですが、区民もそうなのですが、よく政治って自分の生活と関係がないと思われる方がすごく多いんですね。実際に商売をやっていて、お客さんでも違うよねって。自分の生活とはかけ離れたものだと考える人が多いので。そうではないだということをよく僕は説明しているんですね。そもそもみんなが集まった時に、どういった生活がしやすくなるのか。笑って生活できるようになるという話合いの根本がどんどん広がっていくと、最終的には政治になっていくのだよと。要は政なので、

そこを意識して、自分の意見を言えるようになってこれはすごく大事で。それを叶えるには結構足立区は既にやってくださっている部分もあって。メールを送れば区長は必ず読んでくれて、それに対して答えてくれるという声が聞こえてくるので、既にできあがってはいるのですが、さらに進化させてほしい。それは今回、子どもに向けてもそのような機会をくださって、それに応えてくださろうという姿勢が出ているので、既に始まっている体感はしています。

(石阪副会長)

P T Aの活動自体、今大変ですよ。岡山県では解散しましたね。保護者もそういった活動に参加するということで、本来主体的に子どもを守るために参加するという動きがなかなか取りづらくなっているというか、義務的になっている。このあたりはどうですか。

(笠井委員)

私の中学校はかなり真っ只中にありまして。結果的には関心ですね。保護者の関心が子どもに向いていない場合が多すぎて、結果的には自分の都合で親があっちを向いているところがあるんですね。それを一からもう一回線を引き直して、そういうものではないよと。子どものためにできているのだよというのを、今は一生懸命ゼロからやっています。

(石阪副会長)

親としては区とか先生にお任せなんです。ね。

(笠井委員)

行政に向かって区民の方がそうするのと同じで、そこの手早いプロセスというか、上手いつなぎ方、応え方がこれからは重要になってくるのだらうというのをすごく感じています。

(近藤区長)

先日、P T Aの役員との意見交換の場を持った時に、ある会長から要望されたのは、卒業式の時にお子さんが胸にお花を付けるのですが、あれについて区から同じものを各校で購入して配ってもらえないかと。つまりP T Aに入っている人はその会費の中から今までやっていたのだけれども、入らない人がいて、うちの子は付けなくてもいいです、と言う親が出てきている。ところが、卒業式の時に、花を付けている

子どもと付けていない子どもがいる。親がいくらそれでいいと言っても、子どもは悲しい思いをするのではないかみたいな話を伺うと、やはり今のこの時代のP T A活動は、そういったところにも難しさの一端が表れているなと思って聞かせていただきました。ですから、何が区として支援していかないといけないのかということも、本当に時代と共に変わってきているので、それこそ毎年毎年細かくお話を聞きながら、すべてができるわけではないですが、この時代に何をしないといけないのかということの変化みたいなものの大きさを実感しました。

(石阪副会長)

結局、行政がサービスをすればするほど、親は全部行政にお願いをしてしまう。そして、P T Aから離れていくという現象が起きるかもしれないので、ある意味では主体的に子育てに参加するような仕組みを作っていないと、何でも行政や学校にお任せとなると、結局今言ったように、子どもたちの中で差別や分断が起きてしまう。結局どうなるのですか、花が付いていない子どもは。

(近藤区長)

今のところはまだそこまでではないと思います。P T Aの方で会員になっていない方も負担していただいて付けていただいているのだと思います。それが大きくなってくると、続かなくなるとのことですね。

(笠井委員)

既に熊本県ではコサージュ事件というので裁判にまでなっていて。判決は結果的には生徒はサービス対象なので、当然均等にすべきだと。そこら辺がP T Aの課題でもあったのですが、当然サービスだから分け隔てなくやるのが一番いいよねと。それが基準だよねというのがちょうど広がり始めたところで。やはりそこに区が、もしくは市がそれをサポートしてくれたら楽だよっていうところから始まって、今回区長にお願いしたんですね。

(石阪副会長)

これ例えば町会・自治会も一緒ですか。区が支援をすればするほど加入率が下がるみたいな。この間足立区はずっと下がっていて。市村

委員、どうですか。地域の活動を考えると。

(市村委員)

町会の加入率については、新しい若い世代の人は、町会に入るとメリットがあるのか。という話をされるのですが。現実には大したメリットはないのですが、普段からの付き合いをしておくことによって、災害とか何かあった時に助け合うことができるよというメリットがあるのかなとは思っているのですが、なかなか理解がされていないところがあるのかなと思っています。

それから、私は生まれも育ちもずっと足立区ですが、私の小さい頃から比べると、足立区のイメージは相当良くなっています。区長がすごくイメージを上げてくれたこともあります。私が小さい頃の足立区と言うとみんなから馬鹿にされるところがあったぐらいに、下に見られていたわけでもないのでしょうけれども、でも今は足立区と言っても「ああ、足立区ね」という感じで揶揄されることもないし。

(石阪副会長)

区民の満足度とかイメージはすごく上がりましたか。

(市村委員)

ある程度の年代の子育ての年になると、足立区から出ていく人が多いということですが、なぜ出ていくのか私には分からないんです。それはある程度子どもを育てるにあたって、足立区よりもっといろいろな意味で生活がしやすい。それが埼玉なのか千葉なのか分かりませんが、あまりお金の掛からないところへ行くのかなという感じがするのですが。

(近藤区長)

担当が分析しているのは、やはり一軒家を持ちたいとか、どうせ住むならもう少し広いマンションに住みたいという、住居のことが大きいのではないかと。いくら足立区は家賃が安いと言っても、なかなか厳しいところがあって。

(市村委員)

足立区は子どもを育てやすいという感じを私は思っているのですが。

(石阪副会長)

サービスは充実しているけれども、居住とい

うところが。

(市村委員)

子どもを育てるにはお金も掛かりますし。そういった面の。

(近藤区長)

ただ、移転された後に、足立区でこういうサービスを受けられたのだけど、お隣の市では受けられないとか。行ってしまっただけで初めて気付く驚きをおっしゃる方もいます。

(石阪副会長)

埼玉より全然いいですよ。足立区の方が子育て環境は。ただ、家が高いです。これは23区では住めないですから。

(市村委員)

だから、足立区から外に出るというのは、そういった面があって。足立区も東京ですから。23区内ですから、土地も高いし家賃も高いですから、そういった意味で行くのかなと。

(石阪副会長)

ただ、今はサービス合戦になっているところがあって、子育て支援は。学校給食費は無償でないといけないとか。そうなってくると、今23区は全部大丈夫ですが、どうなるんだろうと。

(渡部委員)

障団連の渡部と申します。よろしくお願ひいたします。今、卒業式のお花の話があったのですが、足立区はとても基本に忠実だと思っています。裏を返すとそこから外れるといじめが発生する。最初のお話で子どもの目線が厳しいというのがありましたが、それは裏を返せば親の目線も厳しいです。ちょっと普通と違うところにもものすごく疎外感を感じる区だと私自身は感じています。それは障害者団体の中でも同じようなことだと思うのですが。基本に忠実というところについては、例えばこういった会議にも障団連の中で障がいを持った方が参加しようとするのが難しい。だから、オンライン会議でやるような場面ももっとフレキシブルにできたらいいなと思ったりします。実際にユニバーサルデザインの会議は、オンライン会議でも同時開催させていただいているのですが、じゃあそのオンライン会議をするにあたって、今、We b e

xというシステムを使っているんですね。Zoomじゃないんです。それはいろいろな問題があるのかもしれないですし、様々多分区の中でも考えてそれにしましょうという決定が出ているはずなので、そこは理解するのですが。どう考えても、今はZoomの方が使いやすいですよ。世の中的にはZoomが主流ですし、いろいろなサービスがある中でなぜWebexを選ぶのかというところで。実際にオンラインの会議でZoomではなくWebexを使うと、音声が乱れて会議に参加しているけれども聞き取れないところが多かったみたいなことが発生する。そうなった時に、もう少しフレキシブルに、オンライン会議をZoomでやろうよということが気軽にできるようになったらいいなというのがまず1点。

もう一つは、公共の公園のトイレなども障団連で回ったりしますが、こちらから要望する際は防災関連でも使いますので、障がい者トイレに大型のベッドを置いてほしいという要望を毎回出しています。その公共施設のトイレを作る際の基準というのは、東京都のユニバーサルデザイン・バリアフリーの基準で作られているものですから、大型トイレは作らなくてもいいという設定になっているんですね。なので、障がい者も住みやすいまちを作るためには、大型ベッドは必要なのだというのを毎回要望するのですが、毎回通っていません。東京都のリストではなく、さらに上に行くような足立スタンダードを様々な場面で作っていくようなオリジナリティが今後は必要になっていくと言うよりは、そうっていただけたらもっと住みやすいなと思うことがあります。

その2点から考えて、フレキシビリティとかオリジナリティというところが、まだ足立区は苦手なのではないかなと感じています。様々なやりたいことをどう広げていくのかという時に、基本に忠実なんです。基本に則ってお花を付ける子どもたちは上手い具合にやりたいことができていくんです。だけど、お花を付けられない、何か障がいがあったり、ちょっと外れるような子どもには、どうしても何かがいじづらいという環境をすごくひしひしと感じていま

す。皆さんのお話の中からも感じます。なので、障がいに限らず、お花を付けたくないという子もいるかもしれない。赤じゃなくて青がいいという子もいるかもしれない。お金がないから、出せないからお花が付けられないという家庭もあるかもしれない。その障がいの個性を、すべての個性を認め合えるようなそういう考え方がもう少し進んでいただけたらいいなと今聞きながら思いました。

(近藤区長)

まず、Zoomでは駄目だという理由はあるのですか。

(勝田政策経営部長)

当初はセキュリティ上の問題で、個人情報扱う場合にZoomに脆弱性があるということで、公共的にはWebexということでやっています。

(近藤区長)

もしそういうことでしたら、例えばお一人はZoom、他の方はWebexってそういうことはできないのか。

(勝田委員)

オンライン会議場に招待するので、どうしても一つの媒体という形になります。区がWebexに参加することは認めているのですが、開催する場合は開催権も含めて、Webexでの開催という形になっています。現状を含めて、見直しが必要なのかは検討します。

(近藤区長)

この審議会だけではなく、他のところでもあるかもしれません。

大型ベッドの件については、よくよく公園の方でも出ています。すべてのところを全部一気にベッドを置くというのはあれですが。ユニバーサルトイレにしたところから、あとはスペースの問題もあって。また言い訳じみて聞こえるかもしれませんが、方針としては持っていますので、おっしゃっていた足立のスタンダードが東京のスタンダードを変えていくぐらいの意気込みでやっていくというのは、それは別にトイレの話ばかりではなく、どの方面でも必要だと思っています。柔軟性、そういったことについては、ルールに従っていくと、うちはこうや

っていますから、というので言い訳になって、職員の一つのよりどころにはなと思います。そこを1歩踏み出したということで、新しい基本計画の策定のタイミングで、そうしたご意見をなるべく末端まで広げられるように努めていきたいと思っています。ありがとうございます。

(石阪副会長)

そういう意味では、多様性であるとか、フレキシビリティとか、今のお話だと、一律同じことをするのではなくて、その子の気持ちに立って、やりたいような形で自由にということが多様性ということなのでしょうか。むしろそういうことに社会が変化をしていくということなのでしょうか。

(渡部委員)

はい。一律お花を付けた方が、もちろん見た目も良くて、気持ちが高ぶるというのはよく分かるのですが。それがやりたくてもできない人もいるかもしれないし。それは何かサポートができればいいですが、やりたくない人も付けなないといけないみたいなことになると、それは、いや、みんな揃った方がカッコいいでしょ、というのは今までの意見だなと私は思います。なので、そこに多様性。付けなくてもいいよねという意見が今後はあった方がいいのではないかと感じています。

(近藤区長)

正直区がまとめて、同じものを付けてくれとお願いしているわけではないので、ぜひ学校ごとにそういう議論ができればありがたいなと思います。これも逆にやめろとかやれという話ではないので、自然な形でですよね。ただ、多様性ということを考えると、最近特に女の子のランドセルの色が非常に寒色系のランドセルを背負っている子も増えてきましたので、少しその辺が変わってきている気がします。希望は持てますが、まだまだそういう意味ではみんな揃ってという考え方が強いのかかもしれませんね。ありがとうございます。

(石阪副会長)

まさに子どもたちがやりたいことができる場を作ってあげて、一律みんな一緒ではなくて、

どういうことができるのかを考える場が必要だということかと思います。この点、片野さんいかがですか。

(片野委員)

女性団体連合会の片野です。多様性の話が出て、まさに私たちが目指すのは多様性社会の推進なのですが。今、世代ごとに1年刻みで変わっているという話をこの間大学教授からお聞きしました。本当に全部あって、同じことをずっと踏襲していくという形がそぐわなくなっているのだと思います。実際に今お花の話聞いていても、そのあたりの教育。上に立つ人の教育がすごく大切で、その人たちが自覚を持って、今すごくスピードを持って変わっている。社会が変わっているということをあまり意識していなくて。特に学校は今までの踏襲で、だから赤い花を付けるなら、ずっと赤い花なんだってなっているのだと思うんですね。

実際に今ちょうど学校に入っていますので、卒業式の時にアーチみたいなものを作るんです。紙のお花で。ある時、1色だけ異なる紫の花がそこに入っていたら隣のクラスの先生がそれを取れと言われていて。私すごくびっくりしました。1個の紫が葬式みたいだって言ったんですね。色に意味はない。その人にとっていろいろな思いがあるわけじゃないですか。強制するのはいかがなものかとずっと思っていて。今の赤いお花を付ける、そういうことを上の方が思っていることが変わっていかないと、これは変わっていかないと思いました。

元に戻ると、やりたいことができるまちということですが、私は横浜市から転入した組です。やりたいことをやらせていただいています。足立区は他の区とは違って、いろいろなことが課題として目を凝らしてみればあるんですね。それに対してどう行動していくのか。自分が見ていくのか。例えば子どもの貧困も、区長が2013年、2014年の時に、学校をプラットフォームにおっしゃった。学校に入ってみたら、様々な課題があって、どんどん良くなっているけど、やはり残された課題があるということが分かりましたので、やはりそういうことを後押ししてくださる区。課題があるとこ

ろで課題に気がついた人が何かやろうと思ったら、後押しをしてくださる区。これがチャンスのあるまちだというのが、私の足立区のイメージです。

あとはレジリエンスがある。他区ですごく苦しい思いをした人が足立区に来て、こういう子どもの貧困の取組みがあって、すごく私は良かったですと。前に住んでいたところはありませんでしたと言われた時に、すごく嬉しかったんですね。今実際に、自分も町会の壇上に上げるという、このところを今の自分のミッションにしているのですが。そういうことを相談しても、ちゃんときちんと応えてくださるんですね。役所の職員の方が本当に私、これは私だから、ここに出ているものだからなのかは分かりませんが、でも本当に自分事として取り組んでくださっています。だから、私たち区民が自分事として問題を捉えて、自分の生活だけではなくて、区にとって良くなることをやる時もこうしたいと思った時に、バックアップして下さります。

(石阪副会長)

そういう意味では足立区は今までも支援をしていて。でも、課題だったのは、横のつながりができにくい。動く方はすごく動かれていて、片野さんもそうですが、一生懸命頑張っておられるけれども、Aという方とBという方がつながるような仕組みがあまりなく、それぞれが同じようなことをいろいろな地域でやっているイメージがありますね。市民活動も横でつながるようになると、多分いろいろなアイディアや考え方が、1+1が2、3、4になっていくというようなですね。これはどうですか。片野さん。

(片野委員)

私自身が思っているのは、横のつながりって地縁なんですね。だから、最終的にNPO活動は地縁から出ればいいと思っています。地縁は絶対につながるんです。いろいろなブロックがあって、つながる機会があるので。

(石阪副会長)

でも今は地縁は地縁だし、NPOはNPOで動いているし。NPOも各団体がそれぞれ自分

のポジションをしっかりとやってはいるけれども、何かそれがつながるような仕組み。元々、協創はそういうところから生まれてきた発想ですが。これが上手く、例えば行政がコーディネートするとか、中間支援団体がコーディネートするとかしてつながっていくと私はおもしろいなと思っているのですが。

(片野委員)

以前協働協創ができた頃は、行政がコーディネートしている時がありました。今は社協がやっています。

(石阪副会長)

まだ発言がない区民の方、お願いします。

(小柳委員)

ちょうど話しやすそうな話になってきたので話すのですが。コミュニティ同士の関わりというのを強化していく。ネットワークを組んでいくというのはかなり重要だと思うのですが。そのためには今、あるデータとしてはインターネットが欠かせないのだろうと思います。今まで区政は、インターネット中心みたいところで言うと、インターネットを使えない人たち、特に高齢者の方々に配慮すると、ちょっとまだだよねという話になっていたと思うので。今回の審議会では特に来年からの8か年計画になるので、ほぼインターネットネイティブとまでは言いませんが、インターネットに慣れ親しんでいる方々がほぼ中心の人たち向けの計画になるはずなので、インターネットは当たり前にあるという前提の政策というか、行政というのが加速されていかないと、なかなか厳しいのかなと思います。

あとは少子化の部分に関しては、正直足立区単体で見て、少子化を食い止めるのはエネルギーの無駄ではないかと思っています。絶対に食い止められないものに対して、巨大な力を掛けられているというのは、他に使える力をそこに使ってしまうと、さらに成果がないということになるので、むしろ子育てなどに向いている自治体があるならば、そちらに子育てが流れていくのは甘んじて見ていく。もちろん足立区の中でマイノリティになっていく子育て世代は、他のマイノリティの方々とまとめてマイノリティ、多

様性の部分でケアしていくというような視点が
必要なだろうなと思っています。

話を戻すと、ネットワークに関しては、多分
今まで皆さんが所属してきたコミュニティとい
うのは、おそらく単位として大きすぎるとい
うのがあると思うんですね。もうちょっと自治体
とかPTAとか、それぞれの団体が大きすぎ
て、結局ピラミッド状の構造になっていて、多
くの人は自分が所属しているコミュニティの末
端であるという感覚で、当事者意識がないとい
う感じになってしまって、なかなかコミットで
きないというような現状があったのかなと思っ
ています。

ではどうすべきかという、10人ぐらいの
コミュニティが無数にあるというような状態に
分散させて、マイクロコミュニティ同士のつな
がり、人それぞれで各々が複数のコミュニテ
ィに属していて、かつそのコミュニティが小さ
い。そうすると、それらのコミュニティが相互
に関連し合って、すべての細かいコミュニティ
がネットワークを形成して、何か一つの課題
が、一つのコミュニティでは解決できない課題
が発生した時に、コミュニティのネットワーク
を通じて、その課題解決に皆さんの力が集まっ
てくるような方向性が、誰かがやりたいこと、
すごく大きい課題があるけど、自分の力ではど
うしようもないというものを解決していく時
の、一番きれいな力の掛け方なのかなと思っ
ているので。そういった小さいコミュニティを後
押しするような仕組みを構成していくのがいい
のかなと思います。

(石阪副会長)

これはネット上ですね。それって匿名性が不
安ですが、名乗ってやるということですね。

(小柳委員)

匿名性かどうかは、コミュニティの性質によ
ると思います。コミュニティの中に匿名の人た
ちがたくさんいて、かつその中で一部の人がバ
ブリックに他のコミュニティとやりとりをする
ために名前を出しているケースもあるでしょう
し。もしくは匿名性の人たちは、自分たちは何
も受け取らないが、自分たちの成果物は公開し
ているので、皆さん撮ってくださいというよう

な、一方通行の関係というのもネットワークの
中には形成し得るので、それも含めて多様なコ
ミュニティがあってしかるべきだというのが考
え方になります。

(石阪副会長)

確かに発想としては面白いですね。小さなコ
ミュニティがたくさんネット上にできあがって
いて、比較的自分が主体的に参加できるとい
う、そういう気持ち良さを持つことが大事だ
と。ここにいらっしゃる団体は大きな組織です
から、その末端で自分が活動するのではなく
て、むしろ自分が主人公になれるようなコミュ
ニティをたくさん作っていく。これは発想とし
ては非常に面白い。ただ、行政がそれにどう関
わるのかは難しいかもしれませんね。民間では
いっぱいできると思いますが。

(秋山委員)

小柳さんがおっしゃった小さいコミュニティ
は、ネットのことだと思うのですが、私の住ん
でいる千住だと、実際にシェアハウスの方が自
主的に夏祭りを開いていたり、そういう団体が
3〜4あります。それを私は新しい町内会と
か、地域コミュニティの形ではないかなと思っ
て参加しているのですが。そういうところに町
会ではないのですが、ちょっとでも補助をあげ
るとか、そんな形の手助けもできるのではない
かと思いました。

(石阪副会長)

新しいタイプの町会・自治会がネット上にで
きあがっていくかもしれませんね。それではま
だご発言ない方から行きたいと思います。遠藤
さんいかがですか。

(遠藤委員)

商工会議所の遠藤です。今お話を伺って
いて、かなりいろいろな価値観や問題が学校など
にはあるんだなということを初めて知りました。
先ほど足立区に定住という話が出ましたが、物
理的には定住するのは難しいです。足立区に限
らず、東京都内に住むというのはこれから相当
難しいと思います。ただ、それに関しては、公
社や住宅公団のようなものを作って、それが住
宅とかそういったものを提供する。そうでない
とできないと思います。あともう一つは、物理

的な問題ではなくて、教育とか医療とかそういった問題。精神的な問題もかなりあるので、制度もあるでしょうけれど、そちらの方を充実していった方が絶対にいいと思います。足立区でできる範囲のもの。あるいはできない範囲のものをある程度きっちり分けて考えた方がいいと思います。できないことを一生懸命やろうとしても、不動産の売買は全くできないと思いますので。さらに最近では本当に値上がりしてしまって、そういうものの取引は本当に難しくて。一般のサラリーマンが東京都内にマンションを買うのは相当所得がないとできないと思います。

（石阪副会長）

ありがとうございます。やはり若い人が住むためには、居住というのは非常に大事ですが、それ以外にも例えば医療とか教育とか雇用ですね。このあたりが他よりも優れているということになれば、足立区に入ってくると思うのですが。山下俊樹委員、いかがですか。

（山下俊樹委員）

医師会の山下です。医師会活動をしていて好きな言葉の一つに、住んでいるだけで健康になる足立区というキャッチフレーズで行政はいろいろなことをしていってらっしゃって。すなわち、自然に体操教室があるとか、あるいは食堂に行っても野菜から食べるようなメニューが置いてあるとかですね。そういったことを進めていこうと。それで主に生活習慣病の予防を目指していると思うのですが。考えてみると、これはある思いがあって、それを特別に聞いてもらいたい、やらせてもらいたいというように発信できる人たちはいいと思うんですよ。でも多くの区民たちは、例えば本当に貧困の人たちは声を上げられない。声の上げ方すら分からないという方々が多いわけで。むしろ自然に拾い上げられる。そういった区というのは、答申で言えばウェルネスの視点を取り入れたまちづくりの推進。これは目立たないけれども、非常にいい考えではないかと思います。

あとは個人的には私も10年近く訳あり家庭の子たちの子ども食堂とか毎週やっているのですが。やはり子どもたちの健康と教育。少なく

とも高校を卒業するまではすくすく育っていった、そこから自分のまさにやりたいことが考えられるような体と頭を作ってあげることが、長い目で見ると大切なのではないかなと考えています。

（石阪副会長）

ちなみにベジタベライフを導入すると、健康寿命が他よりも長いなんていう議論もありましたが、これもかなり改善されてきたのでしょうか。

（山下俊樹委員）

これは行政の方が答えることかもしれませんが、この10年間で1.9歳寿命が延びた。ただし、東京都全体も1.8歳ぐらい延びたので、0.2歳ぐらい差が縮まったと。このペースだと追いつくのに100年掛かるので、さらに革新的な方法が必要なのではないかと考えています。

（石阪副会長）

健康というのは一つ、この区をPRするには良い材料だと思いますし。区に住んでいるだけで健康になるというのはいいキャッチフレーズだと思います。

（近藤区長）

いつの間にか国のキャッチフレーズになってしまったんです。だから登録しておけば良かったなと言っているのですが。それが自ずとというのを、自然とと言い換えるだけで国がいつの間にか使っていました。

（石阪副会長）

ここで宮本会長からいかがでしょうか。一旦皆さんの話を聞いてまとめていただけますか。

（宮本会長）

いろいろお話を伺っていて、改めて興味深いなと思ったのですが。一つはですね、人口構造というか、人口の問題については、一つの共通した認識を持つ必要はあるのではないかという感じがしました。小柳委員が少子化は食い止めることはできないという見方をされましたが、私もそう思っています。これは地方圏に行くとまさに少子化を食い止めることはできず、人口は減少すると。去年ぐらいまではどこの地方も少しでも若い人をうちの県に引っ張ってきてと

か言っていたけれども、ついにもうそれは現実的ではないということで、切り替わったという感じが強くしています。

東京はまだ人が入ってくるのですが、最初にありましたように、東京23区は家族持ちの人が住めるような区ではなくなっていく。これも正しいと思っています。不動産がどんどん上がっていく中で、子どもを育てながら、それこそウェルビーイングを実現できるような空間ではなくなってきている。その中で23区において足立区はまだいい方だとは思いますが。では足立区は大丈夫なのか。埼玉や千葉の方に逃がさないで、足立区に引っ張っておけるのかというと、そういうわけにはいかない感じがします。

それで、人口構造的に見ると、高齢者が一番多くて、私が最初から申し上げていた中年期のシングルの方の割合や、他の区に比べると少ないとは言いながらも、趨勢的には増えていくので。あと10年、20年経つと、中年期のシングルが非常に多くなる。つまり、子どもを持った方は外に出るということなんですね。これはもう人口学の方が明確に言っているように、東京23区というのはずっとその流れをやっているところで。だから、それが現在はあるということ。あとは結婚しない人と離婚する人が多くなっている、中年期のシングル層が目立って東京で増えているという。それだけのことだと思うんです。

そういう意味では、足立区のこれからのイメージってどういうことになるのかということですが、先ほども何人かの方がおっしゃっていて、結局共通しているかなと思うのは、やはり多様性のある区。これは足立区だけではなくて、東京の23区はみんな多様性だと思うのですが。足立区はその中では中心の区に比べると、まだ人間的な普通の生活の残っている区であるという意味では、その特徴を十分に生かす必要があるのですが。それにしてもいわゆる子どもを育てる核家族中心の居住空間ではなくなっていくので、いろいろな人たちが住んでいる。だから、価値観も当然それに応じて多様になっていくので、その多様性を全面的に認め

ながら、認めることによって先ほどの最初のスローガンですが、やりたいことが十分にできて、満足度の高い区をどうやって作っていくのかというようなところに落ちていくというのがよろしいのではないかなという感じがしました。

先ほど小柳委員がおっしゃっていた、マイクロコミュニティの問題は、これはデジタル化の中でマイクロコミュニティはとても重要ですが、もう一方ではデジタルではなくても、マイクロコミュニティって非常に重要になってくると思うんですね。だから、かつての隣近所・両隣的なコミュニティではなくて、もっといろいろな形で結びついている。でもそんなに大きくするというのを考えずに、気の合った人たち、志を一にする人たちがこれで何かやろうよというようなことが、足立区にいますごくスムーズにできるというような、そういう区ですね。これは豊かさの象徴だと思います。そのところで行政の後押しとかっていうのがあるかどうかというのは、とても重要な条件になるのではないかなという感じがします。

(石阪副会長)

今の話は結構衝撃的ですよね。核家族や普通に子どもを育てるなど、これまで日本で普通だと思っていた家庭というのが足立区ではもう成り立ち得ない可能性も出てきた。

(宮本会長)

足立区だけじゃなくて、23区全体がです。

(石阪副会長)

それだけシングル層が増えてくる。それもしかかも中年期に入ってくる。そうなってくると、逆にいろいろな生き方や考え方を認めていくような、多様性のある社会にしていかないと、逆に言えば足立区はもたないよということですね。ある特定の生き方の人だけを支持するという、そういう行政からは脱却すると。

(近藤区長)

その多様性を認め合うというのは、なかなか口で言うと簡単ではなくて。特に最近外国人のいろいろな国籍の方がいらっしゃるわけですが。正直寄せられる区民の声を読むと、それに対する不満とか不安感とか、そういう声は非常

に増えています。分からないから不安になったり、不満を感じたりするところだとも思うのですが、なかなか難しいですね。

(石阪副会長)

ただ、逆に言えば多様性は魅力的でもあるんですね。いろいろな方々のチャンスがいっぱいあるということでもあるので。そうじゃない方にも、いわゆる普通の暮らしだけを尊重しているような市や区とは違って、足立区に来れば自分のチャンスや可能性というのを実現することができるかと前向きに捉えれば、足立区は非常にポテンシャルのある区だということになるのですが。結構、宮本先生の話は、今までの区とはちょっと違った形でこれからの23区であり、足立区というのを考えていく必要があるのではないかと。これは人口動態から将来がある程度予測できるということです。

もっと言えば、係留地としての足立区でやむを得ないということですね。子育てをしようと思ったら、千葉や埼玉に出ていくというのはしょうがないと。

(近藤区長)

そう言い切れないところが区長のつらさなのですが。どうぞどうぞ、千葉へ行ってください。埼玉に行ってくださいというわけにはいかないのです。今日は3人区議の先生もいらっしゃるので。

(石阪副会長)

いかがですか。区議の皆さん。感想を含めてお願いできればと。

(大竹委員)

区議会議員の大竹さよこです。皆様からの意見を聞いて、そうだなと思うところと、また私が気付かなかったところをたくさん教えていただきました。私、議員として街中に入ることが多いのですが、区民の方は意外と足立区のことを知らない方が多いです。こういうところで困っているんです。こうしてほしいんですという声を私に。それが私の仕事ですが、これは足立区ではやっていますよ。足立区ではこういう支援をやっていますよ、と言うと「あ、そうなんですか」という区民が非常に多いです。ですので、私は区民と足立区という自治体をもっと近

づける、そういったことが必要ではないかと思います。当然、今住んでいる方、すべての方もそうなのですが、特に子どもたちに教育の場で、何か困ったことがあれば、自治体、自分が住んでいるところの自治体に行ってごらん。そのホームページを見てごらん。そこに必ず正しい答えがあるよということを教育の場で教えること大事だなと思います。特に災害が起きますと、今はいろいろな情報があります。また、そういった情報の中には、正しくない情報もあります。やはり自治体が出している正しい情報にアクセスする。そういったことを子どもたち、教育の場で教えていくことが大事だなと思います。

また宮本先生からお話があった足立区の魅力。今聞きますと、多様性を大事にする。SDGsで言われている、誰一人取り残さない優しい区、足立区。こういった魅力をもっと発信していくことが大事だなと思いました。

(石阪副会長)

野沢委員いかがですか。

(野沢委員)

本日は貴重な意見を聞かせていただきありがとうございました。足立区として基本計画にあるのですが、目指すべき方向は私個人的には二つだと思います。

一つは今まで足立区は区長のトップダウンのおかげで評価がどんどん高まってきた。これに加えて、今度はボトムアップ。皆さんの意見を聞きながらいいまちを作っていきたい。それに基づいて、ライブミーティングを行う。そして、子どもの意見聴取を行う。こういったことは良い取り組みだと思うんですね。ですので、これを継続していただいて、その結果をフィードバックして、結果として政策に反映していただく。これが本当に大切なのではないかと思います。

それともう一つなのですが、これは先ほど足立区は係留地というお話があったのですが、私はそうは全く思っていないです。足立区は定住に値する素晴らしい区だと思います。しかも今すぐチャンスじゃないかと思うんですね。私は生まれも育ちも川口市でして、そこで30年

ぐらい過ごしていました。今テレビでよく報道されているクルドの方々、中国の方々など非常に取り上げられております。昔、私が中学生の頃は、祭りの時とかも足立区にだけは絶対に行ってはいけないとか、ずっと言われていました。かたくなに守っていて、本当に恐ろしい区だと思っていたのですが。今や全く逆になっています。弟とも足立区って治安が良いって言うけど、実際にどうなのか。という話が出ます。区長がいつも刑法犯認知件数にこだわっていますが、本当に足立区は安心・安全なまちということが定着していると思うんですね。ですので、これを継続していただいて、足立区に住めば安心・安全に暮らせる。それを掲げていただくのは本当にいいことではないかと思います。今日はありがとうございました。

(石阪副会長)

続いて渡辺委員、いかがですか。

(渡辺委員)

区議会の渡辺ひであきと申します。私、生まれてから58年間足立区にずっと住んでいて、区議会議員としても長く働かせていただいているのですが、本当に良い自治体になったなと思っています。今、野沢委員や大竹委員がおっしゃったように、飛躍の時を迎えていると思っています。なのですが、今この基本計画審議会の中で様々な方のご意見を伺ってきて、世代別だったり、地域別の問題や課題の洗い出しができていのだろうかと思っていたら、そうではない側面をたくさん委員の方から教えていただいて、やはり突き詰めていくと、そうしたことを進めていくと同時に、それぞれの方々にどうやって寄り添っていくのか。ここに心を砕いていくことが必要なのだなと思い、この基本計画審議会に勉強をさせていただきました。ありがとうございました。

(石阪副会長)

中村委員、いかがですか。

(中村委員)

教育長の中村です。皆さんの意見を聞いていて、その通りだなと同感するところは非常に多いです。いろいろな学校を今訪問している中で、子どもたちも不登校が多いこともあります

し、外国籍の子どももすごく増えてきていて、実際に子どもたちの現場自体も多様性で、大人よりも子どもたち同士はむしろそういういろいろな子どもたちを受け入れているなという印象があります。むしろ子どもたちの同級生とか友達を受け入れているその気持ちが、ゆくゆくは大人になった時に活かしてもらえるといいなと思います。そういった意味で、多様性を大事にする意味では、子どもたちの意見も大事ですし、そういう当事者の意見、障がいの方も含めて、当事者の意見もちゃんと吸い上げるということが、行政に求められていると思うのが一つ。

それから、子どもの時期にいろいろな課題もあって、それが克服するなりいろいろ支えてもらったということがいずれ、確かに中継点みたいな話もありますが、Uターンして実家がある足立区に戻ってくるとか、そういうことも十分に考えられるので、短く短期的なところで足立区には課題があると言うのではなくて、長期的なスパンで見て足立区に戻ってきて、足立区はいいねと言ってもらえるように、今も取り組んでいくのが大事ななと思っております。基本計画にそういったものが反映されるといいなと感じています。

(石阪副会長)

ちょっとまとめさせていただきますと、皆さんから多様性という言葉が出てきました。つまり今後の足立区を考えた時に、いろいろな方々が入っているので、そういう方々に配慮するような施策であり、あるいはそういう方々が生き生きと活躍できるためには、それなりの環境や制度も必要になってくる。今まで以上にいろいろな方々が活躍できるような環境をどう作るのか。これは一つ大きな課題になると思います。

それからもう一つ、先ほどコミュニティの話もありましたが、主体的に参加をするようなマイクロコミュニティをたくさん作っていく。今の大きな組織がかなり限界に来ているところもある中で、自分たちの意見や考えを形にできるような、そういった組織やマイクロなコミュニティですね。こういったものを例えばそれはデジタル空間なのか、リアルな空間なのか分かり

ませんが、そういうところでいろいろ作っていくための意味では場づくりみたいなものを区として支援していただけると、おそらく皆さんが動きやすくなるのではないかという話もありました。まとめとしてはこのようなところでいかがでしょうか。

(宮本会長)

それでいいと思います。一つだけ訂正させてください。足立区は係留地ということですが、係留するのは若い人たちだけなんです。残る方は足立区だけじゃないですが、定住20年以上の方がずっと残っているんです。その方々にシングルが多いというのが今の変化の傾向なんです。シングルの方は足立区に残るわけです。家族を持つとなかなか残りにくい。ですから、ある意味でシングルも含めて、いろいろなタイプの人が定住する人もいるし、出たり入ったりする人もいます。だけど、地方と違うのは、やはり東京、足立区もそうですが、自由で多様性があるって魅力的だということが大きくて。地方圏で今一番言われているのは、なぜ若い女性たちが出ていくのかなのですが。仕事がないから、学校がないからと言われていますが、実はすごく重要なところに気付いていない感じがします。やはり自由とか多様性とか、男女の差別の問題とか、それがあるから若い女性は地方から出ようとするわけです。そういう意味では、足立区はその対極の区になっていくととても魅力的なところになるのではないかと思います。

(石阪副会長)

国も地方で嫁いだ方がいい、60万支援するというのを撤回しました。昨日、東北の県の審議会に出ていたのですが、今は議題が人口減少対策オンリーです。その多くが若い人がみんな東京に出ていく。特に女性が出ていくという話。やっぱり地方は住みにくいと思って女性が出てしまう。その最大の背景が今おっしゃったジェンダーギャップが地方には根強くある。なかなか女性が生きづらいということを、皆さんおっしゃっていました。そう考えると、出てこられるこの23区なり足立区というのは、やはりそういった人たちを受け入れて、むしろその

人たちが過ごせる環境を作ってあげる。実際に皆さん23区を羨ましがっています。放っておいても人がどんどん入ってくるので。ただ、さっき言ったように、この区は違うなと思ったらやっぱり出ていく可能性もあるので、出ていかないために、足立区に永住してもらうために何が必要なのか。今回の計画ではそういったことを皆さんにご議論をいただきましたので、また皆さんのご意見を元に、ぜひ計画に反映をいただきたいと思います。ここで意見交換会は終了ということで、事務局にマイクをお返しします。

(伊東基本計画担当課長)

多様なご意見をありがとうございました。本審議会ではこのようなたくさんのご意見をいただきまして、事務局の方で計画づくりに取り組んでいるところです。昨年の8月31日に第1回目の審議会を行いまして、丸一年様々なご意見をいただきました。今、私どもの方で答申をいただきまして、計画の方をまとめているところです。11月に新たな基本計画に関するパブリックコメントを実施する予定です。委員の皆様方には、パブリックコメントとは別に計画の素案を改めて送付をさせていただきますので、そちらの方もぜひご覧をいただきまして、ご意見等ありましたら私の方にお寄せいただければと思います。

では、最後になりますが、近藤区長から一言いただけますでしょうか。

(近藤区長)

貴重なご意見をありがとうございました。私が一番印象的だったのは、渡部委員がおっしゃった、足立区民、大人も子どももちょっと違うことに対して視線が厳しいのではないかというお話でした。それは多様性を認められづらいことにもつながります。宮本先生・石阪先生にまとめていただいた、せっかく足立区に縁があって来ていただいた方が、そうした感覚で住みづらいわということで出ていってしまうことにもつながりかねません。様々な多様性を認め合うということは非常に言葉としてはきれいですが、実際に自分が本当にその場に立った時に受容できるかということは、大変厳しいことだと

思います。様々な年代の方も含めて、これから次代を担う子どもたちの教育という点で、非常に責任重大だと思っております。区政としてもその懐の深さというか、柔らかさ。さっき言ってくださった柔軟性・オリジナリティも含めて、そういったところを今回の審議会の新しい皆様方のご意見として、少しでも計画に反映していきたいなと思いました。

最初にPTAの会長からお花の話聞いた時に、付けられない子どもが親のエゴで付けられないということで周りから何でという形で見られたら正直かわいそうだなという発想しかありませんでしたが、中には親がそう言っても付けたい子がいるかもしれません。ですが、付けたくないという子をどうするかという話。赤じゃなくて、私1人だけ紫の花を付けたいと言った時に、本当に一律に同じ花を付けるのがいいのかという議論ですとか、なかなか学校現場では議論がしづらいのかもしれませんが、常にそうした発想を区長として持ち続けたいといけないなということも含めて、今日はいろいろな気付きをいただきました。改めて委員の皆様方に感謝申し上げます。ありがとうございました。

4. 事務連絡

(伊東基本計画担当課長)

それでは、以上をもちまして意見交換会を終了します。お忘れ物のないようお帰りください。またお車でお越しの委員には駐車券をお渡ししますので、お声がけください。それでは本日、そしてこの1年間、どうもありがとうございました。